図書館だより

目　次

図書目録　——坂本　清恵　1
日本女子大学叢書の紹介
坂本清恵編『長唄の伝承—旋律形成に関する学際的研究』
——坂本　清恵　2
著作紹介　川端有子著『庭園家　ガートルード・ジーキル』　——川端　有子　3
ケルムスコット・プレス版ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ
『バラッドと物語詩』『ソネットと抒情詩』『手と魂』
——川端　康雄　4
図書館エントランス展示　——浜口　都紀　6
「お気に入りの場所はどこですか？」——南木　香織　7
図書館からのお知らせ　8

旧図書館で使用した目録ケースとカード式目録

図書目録

坂本　清恵

皆さんは，カードで図書館の書籍を検索した経験がおありでしょうか？　新年度が始まり，築地にある松竹大谷図書館へ，久しぶりに浄瑠璃本の閲覧に行きましたが，閲覧席の脇には，相変わらず著者名検索用カードの木製目録が設置されていて，懐かしい気持ちになりました。

四十年ほど前は，閉架式（窓口に閲覧申請を行い書庫から出納してもらう形式）の図書館には，大きなカードケースが中央に置かれ，カードこそが図書館の主人公だとでもいうような顔で幅を利かせていました。書名，著者名，分類名など，複数の目録カードがありましたが，その分類や配列は図書館によって異なり，五十音順であったり，ヘボン式ローマ字配列であったりと多様でした。

情報のデジタル化により図書目録カードが作成されなくなると，大学図書館ではかつてカードケースのあった場所に検索用のＰＣが設置されました。さらに個々人がスマホで手軽に図書検索できるようになった現在では，検索用ＰＣも数を減らし，新しくラーニング・コモンズが作られて，自由な学びと交流のスペースへと変化しました。

本年３月末，日本女子大学の検索システムが更新されて，図書館システム iLiswave-J クラウドの稼働が開始されました。検索画面の仕様が変わったので，驚いた人もいらっしゃるかと思います。本学の所蔵書籍だけではなく，他大学の所蔵書籍の検索も簡単にできるようになったので，便利になったと感じていただけたのではないでしょうか。

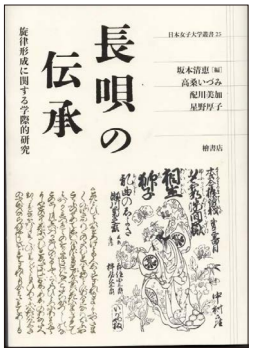
ここ数年，各機関が個別に整えてきたデータベースを統合する動きが急速に進んでいます。国文学研究資料館はこの３月，国立国会図書館，国立情報学研究所をはじめとする諸機関とも連携した「国書データベース」の稼働を始めました。近代以前の書籍を探すには，かつては冊子体の『国書総目録』と『古典籍総合目録』（岩波書店）が使われましたが，それを継承しオンライン検索のできる「日本古典籍総合目録データベース」や「新日本古典籍総合データベース」が作られ，公開画像情報にも接続されるようになりました。それがこのたび統合された形で「国書データベース」として構築されたのです。研究のための利便性がさらに高くなりました。

しかし，資料の実物を実際に手にとってみると，データベースやデジタル画像だけでは明らかにならない情報が，まだまだ多く存することも確かです。オンラインのデータ披見だけで済ませられない，実物による検証を行う必要があることを，改めて強く感じる昨今です。

（図書館長・日本文学科教授）

坂本清恵編
『長唄の伝承―旋律形成に関する学際的研究』（日本女子大学叢書25）

坂本　清恵



江戸時代に作詞作曲された長唄には，中世から親しまれてきた能の詞章を摂り込んだ作品が数多くみられます。摂り込んだのは詞章だけなのか，旋律，拍子などの音楽的な要素はどうなのか，さらには能が中世芸能らしさを保持するために工夫をしてきた音声表現も摂り込んではいないか。そうした問題を明らかにしようと，能楽研究の高桑いづみ，長唄研究の配川美香，長唄演奏家の星野厚子，日本語音韻研究の坂本清恵が共同して研究にあたってきました。音楽学，日本語学のコラボレーション，学際的研究の成果と位置づけることができるでしょう。長唄演奏家のお力を借りながら，残された正本や，音源による研究を展開しました。人間国宝である今藤政太郎師の伝承曲の聞き書きを収録できたのも，その大きな成果の一つでしたが，これからの研究の重要な基礎となるはずです。

同じ近世音曲である義太夫節の正本には，曲節や胡麻章などが記載されており，どのように語られていたのかがある程度分かりますが，長唄の場合，初期には胡麻章を付した正本があるものの，安永七年以降は記譜がなされなくなるという，不思議な現象があります。なぜそうなるのかは，いまだ解明されていません。しかし，この一連の研究では，諸機関の協力を得て，明治以降の長唄の，唄と三味線旋律を留めた資料を紹介，星野による桜井譜の確認など，近現代の長唄譜本の位置づけを行い，今後の長唄研究のための基礎となる正本を示しました。

さらに文献研究としては，一節切『糸竹古今集』『糸竹五色貝』の譜に長唄の曲が残されており，そこから当時の長唄の旋律を復元することになりました。五線譜に直すことで，結果，現行三味線譜と大きな相違がないことも明らかになりました。これを音源をもとに高桑が解明，長唄の拍子が能の近古式と同様であることも明らかになりました。掲載の五線譜化した江戸期一節切譜により，長唄の旋律研究がさらに広がり，深まることが期待されます。

長唄は，江戸長唄といわれ，江戸・東京で親しまれてきた音曲ですが，配川の地道な研究により，上方で初演された曲，演奏者が上方から江戸に下ってきた場合もあり，上方の影響が強い可能性が明らかになりました。これまでも演奏家や研究者から，唄は江戸・東京アクセントであっても，三味線の旋律に上方アクセントが反映していると指摘されてきましたが，それを日本語学の視点に立ち，《京鹿子娘道成寺》において検証しました。

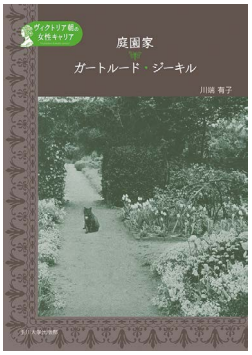
日本語研究にとって本書の要点は，長唄の旋律には上方アクセントから江戸アクセントへの移行がみられることです。金田一春彦氏は，つとに《鶴亀》の「瑪瑙（メノウ）」の旋律がＬＨＬからＨＬＬに変わったことを根拠に，長唄は東京のアクセントが変化すると唄の旋律も変わるとし，学会において認められてきました。しかし，譜本や古い録音資料を丁寧に検証していくと，変化は逆，ＨＬＬからＬＨＬに変しており，それは上方アクセントＨＬＬが，古い東京アクセントＬＨＬに変わったと理解すべきでした。《鶴亀》全般も，演奏者によって上方アクセントから江戸アクセントへ変えられたとみて問題はありません。長唄で，初演が上方と関わりのある曲は上方アクセントで作曲され，それが三味線旋律に保存されたと考えることができます。また，能の謡が中世的な発音を保存し，特別な伝承としてきた鼻的破裂音などは，長唄では全く摂り入れていないことも分かりました。詞章や拍子は摂り込んでも，中世らしさを表現する音声的特徴は摂り込まないのが江戸の音曲なのです。

（図書館長・日本文学科教授）

2023年３月発行　桧書店　435頁　＊図書館目白所蔵，請求記号768.58-Nag

川端有子著『庭園家　ガートルード・ジーキル』―イングリッシュ・ガーデンを作った女性―

川端　有子



自然な趣と，彩りを考慮して配置されたボーダー花壇が特徴のイングリッシュ・ガーデンは，日本でも人気が高い。ガーデニングのテレビ番組や雑誌の特集などでもよく目にするし，日本の各地でイングリッシュ・ガーデンを名乗る庭園はいくつもある。よく間違われがちであるが，この庭は，18世紀に全盛を極めた英国式風景庭園とはまったく別物である。王侯貴族が一大財産を投じて作らせた風景庭園は，庭園とは思えないほど自然の風景そのものを模した大がかりなものだが，今でいうイングリッシュ・ガーデンは，田舎のコテージに見られるような，イギリスの気候風土に適した植物相で構成され，植物の葉や花の色を効果的に配置した19世紀生まれの庭である。そしてこの庭の発案者が，まだ珍しかった女性の庭園家，ガートルード・ジーキル（1843－1932）なのである。

ガートルード・ジーキルはイギリス南部の地主の娘として生まれ，幼いころからその才能を発揮して美術学校に進学することができた最初の世代の女性である。そして彼女はそのキャリアを画家，工芸家として出発した。ラスキンとモリスの影響を強く受け，絵だけではなく金属細工や刺繍，インテリア・デザインにも手を染め，アーツ・アンド・クラフツ運動に関わった数少ない女性の一人であった。とりわけ彼女の刺繍作品の素晴らしさは群を抜いていた。植物デザインへの関心は，やがて庭作りに向かい，後半生はほぼ庭園家として活躍する。彼女の画家としての経験や刺繍に用いられた繊細な色彩感覚が，のちにジーキルの庭の特徴となった。彼女の庭は，色彩設計に優れ，花を絵の具のように使って庭を「描いた」と言われている。彼女が請け負った庭園の数は，400余にのぼる。

当時，庭園は建築物の一部として，建物と込みで計画され発注されることが多かった。ジーキルはエドウィン・ラッチェンスという若い独学の建築家を見出し，パートナーを組んで建築と庭園の融合という道を切り開いた。２人が手掛けた庭園の数はおよそ100ある。ジーキル／ラッチェンスの邸宅と庭園は，当時の裕福な中流階級の人々にとってあこがれの的であった。やがてラッチェンスは20世紀初頭のイギリスを代表する大建築家となり，２人は袂を分かつが，終生仲が良くつき合いを続け，母子ほども歳の差がありながらよき友人同士でありつづけた。

ジーキルは自宅兼仕事場として，サリー州にマンステッド・ウッドという邸宅を建てた。そこで植物の栽培はもちろん，品種改良などを自ら行い，苗の販売もしていた。自分の家族は持たなかったが，ネコを愛し，この家にも庭にも，いつもネコたちが遊んでいた様子が，彼女の撮影した写真からうかがえる。また，この地方には，水彩風景画で有名になるヘレン・アリンガムや，画家のフレデリック・ウォッツの後妻で陶芸家のメアリー・ウォッツ，庭園家のマリア・テレサ・アールら女性芸術家が暮らしており親しく行き来していたという。

ジーキルは生涯で15冊の書物を著し，雑誌『ガーデン』『カントリーライフ』に多くの記事を書き，庭園作りを依頼してくる人たちに膨大な数の手紙で答え，指示を出し，書いたものを残している。庭園というのは手入れをしないことにはすぐに失われてしまい，ジーキルの庭の中で今でもそのまま残っているものは数少ない。しかし彼女が書き残した庭園設計図や植栽の指示，色彩の図示のおかげで復元することができ，現在もいくつかの庭園がもとの形で蘇っている。現在，我々がイギリスらしいと感じる花咲き乱れる庭園の多くは，彼女の造園法に学んだものなのだ。

（児童学科教授）

2020年６月発行　玉川大学出版部　159頁　＊図書館目白所蔵，　請求記号629.23-Kaw

ケルムスコット・プレス版ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ『バラッドと物語詩』『ソネットと抒情詩』『手と魂』

川端　康雄

ケルムスコット・プレス（以下，KP とも略記する）の刊本にはモリスの同時代人で親交があった人の著作がいくつかふくまれる。本紙連載ですでに紹介したジョン・ラスキン著『ゴシックの本質』（KP 4 ）がそのひとつであるが，今回はラスキンと同様にモリスの芸術家としての生涯に深く関わるダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ（1828–82）の KP 本 3 点を取り上げたい。

ロセッティは19世紀半ばの前衛的な画家集団ラファエル前派兄弟団の中心人物のひとりで，同時に詩人でもあった。父親はナポリの政治的騒乱を逃れてロンドンに亡命してきたダンテ学者であり，母親もイタリア系の移民二世であった。4 人兄弟の長男で，妹のクリスティーナは抒情詩人として名を残した。ラファエル前派の結成は1848年だが，モリスがこの画家集団に注目しはじめたのはオクスフォード大学在学中の1854年，20歳のときだった。じっさいにロセッティの面識を得るのは卒業後建築事務所に就職した1856年で，友人のバーン＝ジョーンズ同様，モリスも 6 歳年長のこの画家・詩人の圧倒的な影響下に置かれる。「君は絵を描くべきだ。きっと描けるようになる」と強く勧められて画家修業を始めた。ロセッティのアトリエに足繁く通い，しばらくボヘミアン風の暮らしを送った。1857年にはロセッティの発案でオクスフォード大学学生会館にアーサー王物語を主題とした壁画の集団制作に参加。モリスの生涯にとって（またロセッティにとっても）その作業以上に重要なのは当時18歳のジェイン・バーデンとの出会いである。ロセッティがおそらくジェインを発見し，絵のモデルを依頼，モリスは彼女を見初め，1859年に二人は結婚に至る。一方，ロセッティは彼女をモデルとして（そして霊感の主源泉として）女性像を描きつづける。さらにモリス商会の前身のモリス・マーシャル・フォークナー商会を1861年に発足した際に，ロセッティもパートナーに名を連ねた。モリス夫妻の新婚の新居レッド・ハウス（1860年竣工）の室内装飾の協働作業の延長上として結成したその会社は，程なくしてモリスの本業となる。

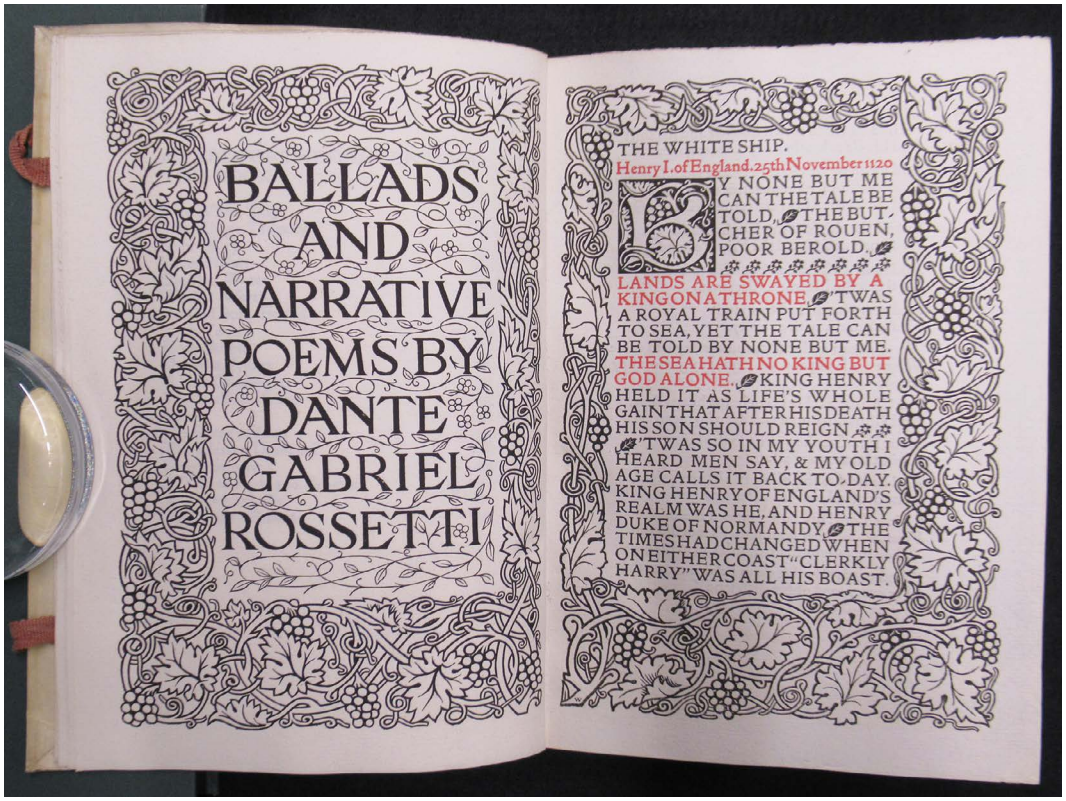
約めて言えば，ロセッティはモリスの生涯に決定的な影響を与えた人物だった。親交を結んだ初期には仰ぎ見る「ヒーロー」であり，詩作品においても特に第一詩集『ギネヴィアの抗弁その他の詩』（1858年）は,『アーサー王の死』やフロワサールの年代記などに取材し, 文学面での（広義の）ラファエル前派的作品としてロセッティの影響が色濃い。

1870年に『詩集』を刊行した翌年，ロセッティはロバート・ブキャナンによって「詩の肉体派」の首領として激しく断罪された。当時の「リスペクタブル」な中流層の道徳律に反するような表現(性愛の包み隠さぬ賛美)が攻撃を受けたのだった。これがロセッティには大きな精神的打撃となり，被害妄想に陥り，阿片剤（ロードナム）を服用しての自殺未遂まで起こす。かねてからのジェインとロセッティの親密な関係が要因としてあるのだろうが，モリスはロセッティと次第に距離を置くようになる。ロセッティは1882年に53歳で病死する。その死に際してモリスは友人宛の手紙で，青年期に故人に蒙った恩顧に感謝し，「彼は天才の持つ最も偉大な性質のほとんどを持ち合わせていました」と称えつつ，「彼の仕事を損ない，早すぎる死に追いやることになったあの尊大な厭世観がなければ，彼はどんなにか偉大な人間になっていたことでしょう」と悔やんでいる。

1893年から1894年にかけて刊行された KP 刊本のロセッティ詩集 2 巻は，もちろんその文学的価値を高く評価してのことではあるが，モリスが若き芸術家としての修業時代を回顧しつつ，追悼の意を込めて企画したものだったと見ることができる。書誌データは以下のとおりである。

KP 書目第20番『バラッドと物語詩』（*Ballads and Narrative Poems*）ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ著，ウィリアム・マイケル・ロセッティ編。8 折判（205×140mm），240頁。ゴールデン・タイプ。2 色刷。木口木版題扉付。軟ヴェラム装，絹紐付。紙刷本310部（2 ギニー）。ヴェラム刷本 6 部（10ギニー）。コロフォン日付1893年10月14日。エリス・アンド・エルヴィ社より1893年11月発売。

KP 書目第20番 a『ソネットと抒情詩』（*Sonnets and Lyrical Poems*）ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ著，ウィリアム・マイケル・ロセッティ編（20の第 2 巻）。8 折判（206×142mm），



ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ著『バラッドと物語詩』（ケルムスコット・プレス，1893年）の見開き２頁。活字（ゴールデン・タイプ），ボーダー，装飾頭文字のデザインはウィリアム・モリスの手になる
（所蔵：日本女子大学図書館）

216頁。ゴールデン・タイプ。２色刷。木口木版題扉付。軟ヴェラム装，絹紐付。紙刷本310部（２ギニー）。ヴェラム刷本６部(10ギニー)。コロフォン日付1894年２月20日。エリス･アンド･エルヴィ社より1894年４月21日発売。

編者のウィリアム･マイケル･ロセッティは詩人の弟で文芸評論家。兄の著作権継承者で，ロセッティ家およびラファエル前派の記録係とでも呼べるような役割を担った。以前「詩の肉体派」で批判されたためロセッティ自身が1881年刊行の詩集から削除したソネット「婚礼の眠り」を KP 版で入れるかどうかという問題が生じたが，編者の判断で結局割愛されることとなった。

KP 刊本のロセッティ本はもうひとつある。『手と魂』がそれである。ラファエル前派の活動期であった1850年に彼が中心となって発行した機関誌『ジャーム（萌芽)』の創刊号に発表した短篇物語で，13世紀トスカーナ地方を舞台にして架空の画家キアーロの修業研鑽と精神生活を描いている。小型本の判型がこの詩情あふれる佳品によくマッチしている。書誌データは以下のとおり。

KP 書目第36番『手と魂』(*Hand and Soul*) ダンテ･ゲイブリエル･ロセッティ著。16折判（142×102mm)，66頁。ゴールデン・タイプ。２色刷。木口木版題扉付。硬ヴェラム装。英国向け紙刷本225部（10シリング)。ヴェラム刷本10部（30シリング)。米国向け紙刷本300部（価格は不明)。ヴェラム刷本（３ドル50セント)。コロフォン日付1895年10月24日。英国向けは KP より1895年12月12日発売。米国向けはウェイ・アンド・ウィリアムズ社（シカゴ）から発売。

1894年に米国の某出版社がロセッティの『生命の家』を KP もどきの形態で販売するという出来事があった（当時は米国での海賊版を規制する法律がなかった)。その下手な模倣にモリスは呆れたようなので，米国での KP 版『手と魂』の販売はそれと関係があったのかもしれない。だが手続き上面倒が多いことがわかり，米国で販売した KP 本は結局これだけになった。（文学部名誉教授）

図書館エントランス展示

浜口　都紀

1．「19世紀の家事・料理書」（2022年７月30日～８月28日）

料理の材料や調理の手順等を示すレシピ本は，実は活字本が生まれるずっと以前，写本の時代から存在している。当初は主に男性をターゲットにしていたが，18世紀から19世紀にかけて家事を担当する女性を主たる読者とするようになる。1800年代には有名な『ビートン夫人の家政書』がベストセラーとなり，他にも多数の家事の手引が出版された。

当館も19世紀に英米で出版された家事・料理書を多数所蔵しており，今回はその展示を行った。

４つある展示台にそれぞれ，「プロの料理人によるレシピ」「女性によるレシピ」「レシピやテーブルセッティングの具体例」「ビートン夫人の家政書」というテーマを設定し，複数の関連書籍を展示した。「フランス風パンケーキ」やいくつかのレシピについては試訳も添えた。

「スコッチ・エッグのレシピが初めて掲載された本」「『アンクル・トムの小屋』の著者であるストウ夫人の姉が執筆した本」「料理をアルファベット順に配列した最初の辞典」など，さまざまな資料を展示し，期間中に行われたオープンキャンパスでも多数の来場者にご覧いただく機会があった。今回展示しきれなかった資料や，日本の家事書の展示も企画してみたい。

2．「2023年の干支・「癸卯」」（2023年１月16日～２月28日）

図書館で所蔵する幅広い資料に触れていただく機会となることを願って，今年の干支であるウサギに関する展示を行った。民俗学や美術で扱われるうさぎ，生物学的にみたうさぎ，絵本・童話・小説にあらわれるうさぎを蔵書からピックアップして展示した。

物語の中のうさぎは数が多く，どれを選ぶか苦労した。とりこぼしもたくさんあったかと思うが，ピーターラビット，アリスの白うさぎ，江戸の赤本に出てくるうさぎ，うさこちゃん，カメと競争するイソップのうさぎなど，幼いころに触れたうさぎと久しぶりに再会した方もおられたのではないだろうか。

展示を紹介する掲示には，さりげなく図書館の利用カードでおなじみのうさぎも参加している。今後も干支シリーズの展示は続けていきたいと考えている。

「お気に入りの場所はどこですか？」

リラックスするにも，集中するにも環境は大事ですよね。

この図書館は，フロア周りを回遊していくようにスロープが設けられ，様々な空間があります。図書館に通っているうちに，自然とお気に入りの場所ができるのか，同じ学生を同じ場所でよく見かけます。新入生のみなさんにもお気に入りの場所を見つけていただきたいと思いますので，ここでは座れる場所に焦点を絞って，図書館内をご紹介したいと思います。写真の場所を是非館内で探して，一度座ってみてくださいね。椅子が一列に並んでいてもよくつかわれている椅子とそうでない椅子があります。課題が進む椅子，落ち着く椅子，眠りに誘う椅子‥様々揃っています。賑やかな場所も静かな場所もあります。是非お気に入りの場所を見つけてみてください。

（館員・南木香織）

図書館からのお知らせ

図書館の動きを皆様にご理解いただき，一層ご利用いただけるよう，2022年度の主な取り組みをご紹介します。今後もさらなるサービス向上に向け，取り組んでまいります。

○コロナ禍における図書館

2022年度は対面授業が本格的に再開となり，図書館にも利用者が戻ってきた。開館時間や開館日程も通常のパターンとなり，入館者数は開設年度である2019年度の９割超まで復した。しかし大学のBCP（行動指針）による一定の行動制限のため学生，教職員以外の利用は制限が続いた。ただし，卒業生については８月１日より事前予約制による利用を再開した。

来館型利用が主となる一方で，非来館型サービスの拡大も継続している。学生を対象とする所蔵図書の郵送貸出は引き続き実施し，2022年度は学部学生を対象に87通を発送した。また，Web上での購入依頼提出を開始した。10月には専任教職員，大学院生の学外図書貸借依頼申し込みのWeb受付も始めている。

2022年度実施した利用者向け講習会

1年次オリエンテーション

遠隔（動画を作成しLMSにて公開）による実施

教員からの依頼等により授業時間内に実施

計39回691名参加

児童１回13名，食物２回16名，

住居３回88名参加，被服６回64名参加，

英文12回190名，史学５回128名，

社会福祉６回103名，教育４回89名，

この他，１学科にテキストを提供した。

図書館主催で実施

・新大学院生オリエンテーション

図書館HPにスライドを掲載

○図書館システムのクラウド移行

2023年４月に図書館システム（iLiswave-J）がクラウド版に移行するため，年度末にかけて検証と準備作業が行われた。学内でのサーバ管理が不要となり，安定した稼働が期待できる。今回の移行により，検索画面等に若干の変更が生じている。

○電子図書館LibrariE（ライブラリエ）を利用した学生選書

ライブラリエはタブレットやスマートフォン，PC等で一定期間「借りて読む」ことができる学生向け電子書籍サービスである。2022年度前期は図書館の学生アルバイトによる選書を行い，後期は学生入館者の投票により購入タイトルを決める試みを行った。図書館入口のエントランス・スロープに，４つのテーマに沿った気軽に読める図書のリストを掲示し，読みたい本にシールを貼る形で投票を募った。216票の投票が集まり62件の利用を開始している。

○展示

４～５月に「フィクションの中の感染症」，８月に「19世紀の家事・料理書」１～２月に「2023年の干支・「癸卯」」の展示をエントランス・スロープで行った。

○西生田保存書庫について

西生田図書館は2021年４月より42万冊収容可能な「西生田保存書庫」としての運用を開始している。保存書庫の資料は，目白に取り寄せて利用することになる。取り寄せは週５回実施しており，外部倉庫に委託していた時期とほぼ同じように利用することができる。

○ラーニング・コモンズさくらの活動について

2022年度の在者室数は前年度比で50%以上の増加となった。また，のべ11名のラーニング・サポーターが活動し，162件（うちオンライン12件）の相談を受け付けた。これは前年度の２倍以上の件数である。ラーニング・サポーターによるオンラインミニ講座も計５回開催した。

編集後記　４月より原則として対面授業となり，多くの学生で図書館にもようやくコロナ禍前のような活気が戻ってきた。初めてでも久しぶりでも館内のお気に入りの場所を見つけてほしい。エントランス通路で折々に行っている展示の最近２回分を紹介した。洋書の料理書はオープンキャンパス来場者に人気で，父娘で熱心にご覧くださる光景も見られた。巻頭写真は，蔵書検索が機械化される前まで資料探しの寄る辺だった検索用目録カード。

2023年度編集委員：飯山智子．水嶋寿恵．南木香織　（飯山）

日本女子大学図書館だより　No.177　2023.6.23　ホームページ https://lib.jwu.ac.jp/lib/LP.html
日本女子大学図書館発行　〒112-8681　東京都文京区目白台２丁目８番１号　☎（03）5981-3195